

第4問

「歌合」は、複数の歌人を左方・右方の二組に分け、同じ題で詠んだ歌を二首一組、左右の番として比較し、両者の

優劣を競う文学的な集団競技である。鎌倉時代初期に開催された『六百番歌合』では、左右六名ずつの歌人たちが歌を競った。次の【文章Ⅰ】はその一部で、「雲」を歌題として詠んだ左方・顕昭、右方・藤原経家の歌を競わせた一番である。二人の和歌に

続いて、それぞれの相手方の和歌に対する批判と、その優劣を判断した判者、藤原俊成の判定の言葉(判詞)とが載せられている。

【文章Ⅱ】は、顕昭によって後日書かれた文章の一部で、藤原俊成の判定に対する反論が展開されている。これらを読んで、後の問い(問1～4)に答えよ。(配点 45)

【文章Ⅰ】

(注1) 左持

(注3)

宇津の山夕越え来れば雲降り袖ほしかねつ哀れこの旅

右

(注4)

今日も又交野の御野に雲してかわく間もなき狩衣かな

(注2) 顕昭

(注2) 経家卿

右申していはいはく、左の歌、させる難なし。

左申していはいはく、右の歌、古めかし。

(注6)

判じてはいはく、左、「袖ほしかねつ哀れこの旅」などいへる、寂びては聞こえ侍るを、「宇津の山」こそ、^(ア) 抛り所なくや侍ら

ん。伊勢物語などに、「宇津の山辺のうつつにも」などいへる所にも、雲降りとも見えす。その故なきならば、^b 雲降りぬべ

からん山も、「哀れこの旅」といはん所も多く侍らんかし。「宇津の山」、故無くては、さまで抛り所なくや侍らん。右は、「交野

の御野」も、かの「濡れぬ宿貸す人しなれば」といへる歌も霰にて、はた鷹狩も今少しをかしく聞こゆ。左右共に、「宇津の山」

「交野の御野」も、いづくにてもありぬべく聞こゆ。同じ程のことと申すべし。

(『六百番歌合』冬部・霰による)

(注) 1 持——引き分け。結果的に引き分けに終わったということ。

2 顕昭・経家卿——共に平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した歌人。

3 宇津の山——現在の静岡県静岡市宇津ノ谷と藤枝市岡部町とにまたがる山。

4 交野の御野——現在の大阪府交野市北部から枚方市にかけての丘陵地。皇室の狩猟地や貴族の別荘があり、平安時代には遊猟地として伝統的な地になっていた。

5 難——欠点。批判すべきところ。

6 判じて——左右の和歌を比較し優劣を判定して。

7 「宇津の山辺のうつつにも」——『伊勢物語』東下りの段に見える和歌。当該箇所は【文章Ⅱ】の中に引用されている。

8 「濡れぬ宿貸す人しなければ」——「霰降る交野の御野の狩衣濡れぬ宿貸す人しなければ」(藤原長能『詞花和歌集』)

【文章Ⅱ】

顕昭、陳じ申してはいはく、霰は^(注1)処も分かず降るものなれば、何の野山海河にてもよみたらんに、憚り^{はば}侍るべからず。雨雪の

ふり霜露のおかんに、ただ同じ事なり。ただし、^(イ)旅に寄せてよまんにとりては、伊勢物語に、「駿河の国宇津の山に入りて、

いらんずるみちは、いとくらみ心ぼそく、つた、かへでしげれり。物心ぼそう、すすろなるめをみる事と思ふに、修行者にあひたり。『かかる道はいかがいます』といふをみれば、見し人なりけり。京に、その人のもとにとて、文をかきてつく。

するがなる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」とよめり。^(注2)この事のありさま、誠に面影にたちて、心ぼそく物がなしければ、かの山路をとり分きて、^(ウ)よみて侍るなり。あづまちの山路には、逢坂、不破の関、二村、高師、宇津山、足柄、

箱根、^c これら皆よみならはせり。思ひかけぬ所の、歌にもよまぬをとりいでてよみて侍らばこそ、ききつかず、^d なにのよせ

とも侍らめ。かの物語には宇津山といふについて、「うつつにも」とそへたり。今の歌は、かの山の心細きかたを、雲に引きよせて侍れば、この難侍るべからず。さる歌あればとて、あながちに「宇津の山辺のうつつにも」とよまば、無下の古歌になり侍りぬべし。又、雲ふれる所をたづね侍るに、^(注3) 万葉に少々侍り。

雲ふり板ま風ふき寒き夜やはた野に今夜わが独りねん^(注4)

雲ふる遠つ大海による浪のたとひよるともにくからなくに^(注5)

雲ふる霞松原すみ吉のおとひむすめとみれど飽かぬかも^(注6)

いや姫のおのれかみさび青雲のたなびく日すら雲そほふる^(注7)

これらの如き歌は、はた野、遠つ大海、霞松原、いや姫にのみ雲を必ず詠むべきか、いかん。その外は何の所にも詠むとも、雲より所なしといふ難は、ただ同じ事か。又、伊勢物語に、「宇津の山べのうつつにも」といへる所にも、雲ふるともみえずと侍る、いかん。かの物語に詠める歌枕に、花をよみ、月をもよめるにつけて、かの人、必ずしもその跡を尋ねて詠まざるや。

(顯昭『六百番陳狀』(冬部)による)

(注) 1 陳じ申して——反論申し上げて。

2 逢坂、不破の関、二村、高師、宇津山、足柄、箱根——すべて東海道にある地で、古来しばしば歌に詠まれた。

3 万葉——『万葉集』。 4 遠つ大海——浜名湖の古い呼び名。

5 霞松原——現在の大阪市住之江区安立付近にあった松原。 6 おとひむすめ——住吉に住んでいた遊女。

7 いや姫——架空の地名。『万葉集』では「弥彦(山)」。^(注8) 本来、現在の新潟県西蒲原郡弥彦村と長岡市との境にある「弥彦山」を詠んだ「いや彦」が、「いや姫」として誤って引用されたもの。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

23

～

25

。

(ア)

抛り所なくや侍らん

23

④ ③ ② ①

① 根拠となつてほしいのです
② 根拠がないということはありません
③ 根拠がないではありませんか
④ 根拠がないと聞いております

(イ)

旅に寄せてよまん

24

④ ③ ② ①

① 旅に寄せて詠んだはずのこと
② 旅に寄せて詠むつもりのこと
③ 旅に寄せて詠むべきこと
④ 旅に寄せて詠むようなこと

(ウ)

よみて侍るなり

25

④ ③ ② ①

① 詠んでいるのでございましょう
② 詠んでいるのでございます
③ 詠んでおられるはずで
④ 詠んでおられるご様子です

問2 波線部 a ～ d について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① a「聞こえ侍るを」は「を」が間投助詞で、語り手である俊成から、聞き手への同意を求めた表現になっている。
- ② b「霰降りぬべからん山」は「ぬ」が強意の助動詞で、これが「降るだろう」という推量の確実性を強めている。
- ③ c「これら皆よみならはせり」は「り」が尊敬の助動詞で、書き手の顕昭から読み手への敬意がこめられている。
- ④ d「なにのよせとも侍らめ」は「め」が推量の助動詞の已然形^{いぜん}で、顕昭のためらう気持ちが強く表れている。

問3 【文章Ⅰ】の内容についての説明として適当でないものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 顕昭の歌は、『伊勢物語』を背景にしているせいで古めかしくなっていることが欠点だと指摘されている。
- ② 俊成は、経家の歌における「交野」と「狩衣」の語は「霰」に合っていないのではないかと指摘している。
- ③ 顕昭の歌は、山路を歩きながら霰に降られ、袖が乾かないというところには風情があると指摘されている。
- ④ 俊成は顕昭の歌も経家の歌もどちらも似たような欠点があり、同じ程度の出来だと評価している。

問4

次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】を読んだ教師と生徒たちの話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師——俊成が「宇津の山」の歌について批判している「抛り所なくや侍らん」とは、どういうことでしょうか。話し合ってみましょう。

Aさん——『伊勢物語』に「宇津の山辺のうつつにも」と詠んだ歌はあるけど、その歌に雲は出てこない。そのことを「故なき」と言っているね。

Bさん——「宇津の山辺」と「雲」を結びつける「故」、つまり理由がないから、「雲」の題で「宇津の山」を出す必然性がないということか。

Cさん——俊成は、歌枕やテーマに「故」や「抛り所」がない歌はダメだという考えなんだね。

教師——それでは、この問題について顕昭はどう答えているでしょうか。

Aさん——【文章Ⅱ】の「思ひかけぬ所の、歌にもよまぬをとりいでてよみて侍らばこそ」は「かの山路をとり分きてよみて侍るなり」に対応しているのかな。

Bさん——あ、そうか。 I ということを言っているんだ。

Cさん——だから、「宇津の山」を出してくる根拠がないという批判は、この歌にはあてはまらないと主張したんだ。

教師——ここで、顕昭の引用した『伊勢物語』の同じ箇所を異本で読んでみましょう。

むかし、男、すずろなる道をたどりゆくに、駿河の国、宇津の山口にいたりて、わが入らむとする道に、いと暗う細きに、つた、かへでは茂り、もの心ぼそく思ほえて、すずろなるめを見ることと思ふに、すぎゆくにさしあひたり。「かかる道にはいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人

のもとにとて、文書きてつく。

中空に立ちゐる雲のあともなく身のいたづらになりぬべきかな

とてなむつけける。かくて思ひゆくに、

駿河なるうつみの山のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり^(注)

と思ひゆきけり。

(注) うつみの山——うつつの山のこと。

(『伊勢物語』(小式部内侍本)^{こしきぶのなひし}・異本一〇による)

Cさん——顕昭も指摘していた、旅先での心情について書いているところはいいしよだ。

Aさん——でも、II。

教師——二首出てくる和歌には同じ修辭法が使われているけど、気づいたかな。

Bさん——はい。III。

教師——そうだね。どちらの歌も歌のメッセージは後半に明確に示されていますね。

(i) 空欄 I に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 「雲」はどこでも降るから、場所が有名かどうかはこだわらず、『伊勢物語』に書かれたことを重視して詠んだ
- ② 「雲」のイメージからはほど遠い場所を探し、誰にとっても意外な感じのする場所だからこそ詠んだ
- ③ 『伊勢物語』には「雲」自体は出てきていないが、山路の描写に「雲」が織り込まれているから詠んだ
- ④ 「雲」から連想できる所を詠もうとしたのではなく、『伊勢物語』の旅路の心細さを「雲」に重ねて詠んだ

(ii)

空欄

Ⅱ

では、顕昭が引用した『伊勢物語』と小式部内侍本『伊勢物語』の違いが指摘されている。空欄Ⅱに入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

29

。

① 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人に送ったとされている歌が、小式部内侍本では送られず、独りで心の中に思い浮かべたことになっているんだね

② 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人に送ったとされている歌が、小式部内侍本では、送られた歌をさらに補足するための歌になっているんだね

③ 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人から直接渡されたことになっていた歌が、小式部内侍本では知人を介して渡されたことになっているんだね

④ 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人から送られたとされている歌が、小式部内侍本では誰にも託されず、送られなかったことになっているんだね

(iii)

空欄

Ⅲ

に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

30

。

① 「中空に立ちゐる雲の」の歌では「身のいたづらに」と言い、「駿河なるうつみの山の」の歌では「夢にも」と言つて、人間の頼りなさを表現しています

② 「中空に立ちゐる雲の」の歌は「あともなく」「いたづらに」が縁語で、「駿河なるうつみの山の」の歌は「うつみ」「うつつ」が縁語になっています

③ 「中空に立ちゐる雲の」の二句は「あともなく」の序詞^{じふごは}で、同様に「駿河なるうつみの山の」の二句も「うつつにも」を引き出す序詞になっています

④ 「中空に立ちゐる雲の」は「あと」が「後(過去)」と「跡(形見)」の、「駿河なるうつみの山の」は「うつみ」が「宇津」と「埋み」の掛詞^{かけことば}になっています